

生徒の“心”に火をつける！

## 続 「アクティブ・リーディング」の実践

順天中学校・高等学校の和田玲先生とその研究チーム  
「例の会」との共同研究から生まれた実践例。  
生徒の感性をいかに刺激し、はつらつとした自己表現へと導くか。  
徹底した議論と手直しを繰り返して磨き上げた珠玉の指導案です。

今回の授業者：丹羽 祥（和洋国府台女子中学校高等学校 教諭）

### その17 「教育支援」の指導例



#### A Challenge in a Slum

①One Japanese couple is trying to make a difference in people's lives in a slum in Nairobi, Kenya. ②Mr. and Mrs. Ichihashi started Koinonia Education Centre in 2003, a kindergarten which provides basic primary education to children whose families are destitute. ③The school aims to develop each child's spiritual, emotional, physical and intellectual potential. ④Parents are encouraged to pay a commitment fee, which often fosters a sense of family responsibility. ⑤This changed the attitudes of many parents. ⑥They stopped begging for money and food, and instead, started working, which made their children feel proud of them. ⑦In 2005, Mr. and Mrs. Ichihashi extended the education to primary school so that the children could continue to learn and grow at Koinonia. ⑧The couple hopes to teach the children that life is full of opportunities, and to help them grow to understand that they can always say yes to life, under whatever circumstances.

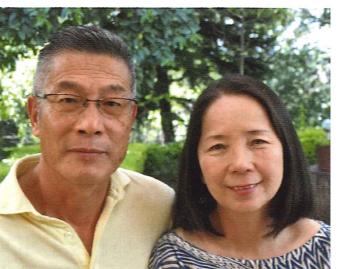
和田 玲『アクティブ・リーディング Basic』（アルク）、Lesson 16

ケニアのスラムの子どもたちに「人生を肯定して生きてほしい」という願いを込めてKoinonia Education Centreを開校した市橋隆雄・さら夫妻の生き方は、多感な時期を生きる生徒たちの心にどう映るのでしょうか。夫妻の活動を通して生徒が自分自身の生き方について考えるきっかけにしてほしいと思いました。

#### Introduction — 市橋夫妻の挑戦とは？

まず生徒たちのよく知っているアニメのキャラクターのイラストを見せ、「前向きな人」とはどんな人かを考えてもらいます。生徒には“Are you positive or

negative?”と問い合わせ、続いてスラムの写真を見せ、“Can you be positive if you live here?”と質問します。生徒たちは思わず「無理！」と声を上げます。その後、ケニアのスラムの説明をし、「そこで暮らす子どもたちを前向きにするために行動を起こした日本人の夫婦がいる」と市橋夫妻の写真（右）を見せます。生徒たちが「一体この人たちは何をしたのだろう」と疑問を抱いたところで、本文に入ります。



市橋隆雄・さら夫妻



丹羽 祥先生

和洋国府台女子中学校高等学校教諭。さまざまな研修会に参加しながら授業改善に励む。2017年度からは同校独自の授業モデル開発において中心的役割を担う。今年度からは上智大学大学院のTESOLコースで学ぶなど、研究にも精力的に取り組んでいる。

#### Jump — 子どもたちに教えたいこと

Q & A、穴空き音読、リテリングなどで内容確認を行った後、理解を深める段階に入ります。“Why did Mr. and Ms. Ichihashi start a kindergarten?”と問うと、生徒たちは夫妻の「子どもたちに前向きに生きてほしい」という願いを思い出します。

次に、“Mr. and Ms. Ichihashi teach the children three things at Koinonia so that they can say yes to their lives. What do they teach?”と投げ掛けますが、生徒たちはなかなか答えが出せません。そこで、1枚の写真を見せます。“Children in Koinonia are different from other kids in a slum. What are the differences between them?”自信に満ちた子どもたちの笑顔を見て、生徒たちはさらに考えます。一人の生徒がつぶやきます。「思っていたより服がきれい」。

市橋夫妻は、①To be clean and neat ②To be polite and kind to others ③To master Englishの三つをKoinoniaで徹底しています。例えば、水道がないスラムではシャワーを浴びたり洋服を洗濯したりすることが簡単ではありませんが、市橋夫妻は清潔で身なりを整えることは社会生活を送る上で重要だと教えます。また、ケニアでは良い職業に就くために英語力が必須であるため、Koinoniaでは授業は英語で行っています。

市橋夫妻は「社会で自立する自信を持つことが、前向きに生きることにつながる」と考え、保護者も巻き込んで粘り強くスラムの子どもたちを育てているのです。

#### Output — 第二の市橋夫妻を探そう！

「きっと世の中には他にも社会のために活動している人がたくさんいる。今度はみんなが第二の市橋夫妻を探し、プレゼンしてみよう」と生徒たちに投げ掛けます。

プレゼンは今回読んだ英文の文章構造に沿って、①人物の紹介、②具体的活動、③自分の思いで構成すること、その人物や活動が理解しやすいように写真などのビジュアルエイドを使うこと、クラスメートが分からぬような難解な単語や表現は使わないことなど、いくつかのポイントを伝えました。その後、平易な英語と図を用いた実際のプレゼン例を紹介すると、「自分にもできそうだ」と生徒たちの表現意欲に火が付いたようです。



子どもたちと市橋さら氏

発表では、それぞれの生徒が自分の選んだ人物の素晴らしさについて熱く語り、その思いの強さに驚きました。また、生徒自身もクラスメートの数だけ社会貢献活動について知ることができ、またその思いを共有できただことがうれしそうであり、誇らしげにも見えました。

生徒たちの心はとても柔軟です。大人が上手に興味を引き出せば、その世界は大きく広がります。「私も思うだけでなく、社会のために何か行動を起こせる人間になりたい」。ある生徒の授業後の感想を読み、うれしい気持ちになりました。これからも英語の授業を通して、生徒の心を育てることを目指していきたいと思います。

#### 監修 和田 玲先生の総括

##### 「向社会性」を刺激する取り組み

ジェネリックスキルのうち、地球市民力、個人的・社会的責任力（違いを受け入れ、道徳観や同情心を持って自己に責任を持ち、社会に積極的に貢献しようとする力）の育成と結び付く良きお手本と言えます。

子どもたちの中には“人や社会のために役立ちたい”という気持ちがあふれています。心理学では「向社会性（利他性）」と呼ばれます。主体的な学習意欲を促進する大切な動機付け項目の一つです。丹羽先生は、この「向社会性」を上手に刺激しています。アウトプット課題は特に新しいものではありませんが、これを高校時代という多感な時期に行うことには意味があります。人生の方向性を真剣に考え始めるこの時期だからこそ、生徒の自己同一性（自分とはどういう人間で、将来どのように生きていきたいのかという意識）の確立の一助となる発表課題は、指導時期として適していると言えます。仲間たちの発表から刺激を受けてego identityの幅をさらに広げていってほしいという先生の意図も教育的に素晴らしいと思います。

人生を俯瞰し、生徒の成長のために何が必要かを十分に配慮した“ことばの教育”的見事な実例でした。